わが国および諸外国における精神遅滞児の抽出方法に関する研究

長　畑　正　道
（筑波大学医学部心身障害学系）

昭和55年度および昭和56年度において，わが国および諸外国における精神遅滞児の頻度および抽出方法に関する研究を行った。今年度は精神遅滞児と診断するための基礎となる IQ の値の時代的変動，ならびに変動を来す要因について検討した。

1. わが国および諸外国における IQ の変動

Hagberg ら[1]（1981）は最近の小児では WISC あるいはビネー式の知能検査で IQ が10ていど高く出ると述べている。わが国においてもこのことは日常経験されるところである。とくに精神遅滞児の心理実験を行う時に MA（精神年令）マッチング法により同 MA の正常児を対照群として用いるが，かかる正常児では IQ を測定すると CA（生活年令）より MA の方が高く，IQ にして10ていど高くなることがしばしばある。

最近 Lynn[2]（1982）はアメリカにおいて標準化された知能テストが年代をおいて日本において何回か標準化されたことに着目し，年代別に日米の値を比較すると，年代によって差のあることを見出した。日本において1936年から1946年に生れた者の IQ はアメリカの規準に換算すると IQ は 104.34 であった。しかし1946年から1959年に生れたものの IQ は 111.20 に向上していることが判った（図1）。この間 IQ にして7ポイント弱が上昇したことになる。この研究において Lynn は1910年の IQ は，WAIS の一部の下位テストしか行っていないので除外し，前述のように1936年以降のものだけをとり上げている。

しかし，その後 Kirkwood[3]（1982）は，Lynn らは1936年以降年代ごとに次第に IQ が上昇したと考えたのに対して，統計処理に対し疑問を提起した。Kirkwood によると図2に示す如く，実線のように1945年以後に生れた年代において IQ がジャンプして上昇したと考えた方がよいとしている。この場合，1910年の IQ は除外すべきではないとしている。

いづれにせよわが国において戦前に比べ戦後に IQ が10ポイント近く上昇したといえる。

2. 日本における IQ の上昇の要因

わが国における近年の平均 IQ の上昇について Lynn[2] は6才児ですでに差のあることから栄養の向上をその原因として大きく取りあげている。しかし Anderson[4]（1982）は人口の都市への移動による血族結婚の減少，体位とくに身長の増大にみられる栄養面での改善，また平均

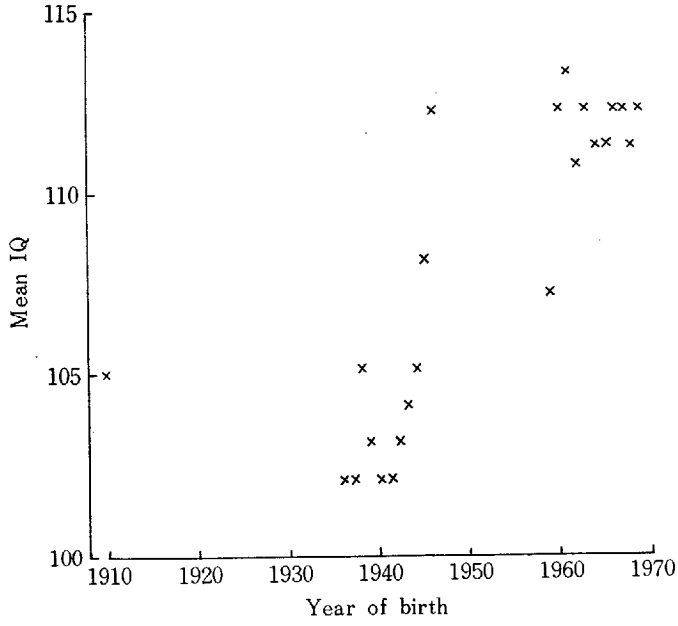

図1　アメリカにおける IQ の標準を100とした時の日本における平均 IQ の時代的変遷 (Lynn, R., 1982)

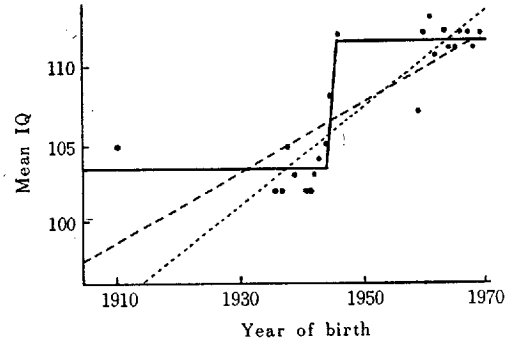

図2　日本における平均 IQ の変遷の統計処理による差（実線：ジャンプ型，破線：1910年の値を含んだ場合，点線：1910年の値を除外した場合）(Kirkwood, T.B.L., 1982)

寿命の延長にみられる保健衛生面での改善，さらに高校進学率の急増にみられる教育面の向上，など，遺伝，栄養，教育および社会的条件といった多面的な要因によって，日本において近年 IQ の上昇がみられたと述べている。

精神遅滞児の疫学的研究においては，とくに軽度のものも対象とする場合に，IQ の値そのものが時代によって異なり，全人口の IQ が次第に上昇して来ていることを常に念頭におくべきであると思われる。全体として IQ が上昇すれば，精神遅滞児の出現頻度は当然低下してく

るわけである。

しかし一方，Hagberg ら[5] (1982) が指摘しているように，極小未熟児の生存例の増加とともに脳性麻痺の出現頻度が最近になり減少傾向から増加の傾向へと転じたと述べている。このことは精神遅滞児の増加にもつながることであるので，とくに重度精神遅滞の頻度を問題とする場合には留意すべきであると考えられる。

3. 結　　語

わが国ならびに諸外国において近年小児の IQ の値が全体として次第に向上して来ていることが報告されている。わが国においては戦前に比べ戦後において IQ にして 7 ポイント弱向上したことが Lynn[2] によって報告された。このような IQ の値の向上は精神遅滞児の疫学的研究において，その出現頻度に大きな影響をおよぼすものであり，十分留意すべき事柄といえる。

文　　献

1) Hagberg, B., Hagberg, G., Lewerth, A. and Lindberg, U. : Mild mental retardation in Swedish school children. I. Prevalence. Acta Paediat. Scand., **70** : 441～444, 1981.
2) Lynn, R. : IQ in Japan and the United States shows a growing disparity. Nature, **297** : 222～223, 1982.
3) Kirkwood, T.B.L. : IQ jump or trend?. Nature, **299** : 8, 1982.
4) Anderson, A.M. : The great Japanese IQ increase. Nature, **297** : 180～181, 1982.
5) Hagberg, B., Hagberg, G. and Olow, I. : Gains and hazards of intensive neonatal care : An analysis from Swedish cerebral palsy epidemiology. Dev. Med. Child. Neurol., **24** : 13～19, 1982.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

3.結語

わが国ならびに諸外国において近年小児の IQ の値が全体として次第に向上して来ていることが報告されている。わが国においては戦前に比べ戦後において IQ にして 7 ポイント弱向上したことが Lynn によって報告された。このような IQ の値の向上は精神遅滞児の疫学的研究において,その出現頻度に大きな影響をおよぼすものであり,十分留意すべき事柄といえる。